

心に残る思い出の広報誌

議会議務局 濱口 高文

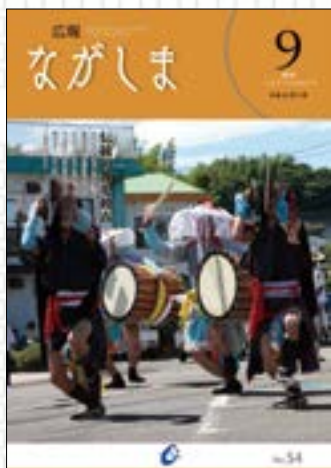
(創刊号〜平成22年8月号を担当)

―校了。〇日の納品をお願いします―
広報誌の編集を終えて業者へ印刷を依頼するときの言葉です。この言葉を業者へ伝えたとき、ホッとする瞬間がやってきます。

さまざまな経験を積めるため、取材に向くのは楽しいものの、毎月締め切りに追われる編集作業は苦痛を感じるものでした。

合併後の第1号から第53号まで作成した私からカメラを引き継ぎ、右も左も分らない状況の中で作成された第54号。第2代広報担当者の創刊号です。担当者が代わったことで広報の視点も変わりました。

第54号は苦痛から解放された瞬間ではなく、初々しく、新たな角度から取材され、ヤル気に満ちた編集作業を終えて、ホッと一息ついた瞬間が切り取られた広報誌です。



No. 54 平成22年9月号から

教育委員会総務課 濱田 将尚

(合併前の「広報ながしま」を担当)

広報係をしていた時、毎回頭を悩ませていたのが表紙の写真でした。記事は完成し、いざ表紙を選ぶとなった時、思ったように撮れていない表紙用の写真に、がっかりしたことが多くありました。

長島フォトコンテストへ応募のあった作品の数々を見ると、私自身が気付かなかった新たな長島町の風景があったり、絶妙な笑顔の人物像を撮っていたりと驚かされ、そのまま広報の表紙にしたいと思わせる力作ばかりでした。

長島町外のかたの応募が多かったこれらの作品は、私のみならず町内に住んでいるかたがたに新たな長島町の一面を見せてくれたのではないのでしょうか。



No. 71 平成24年2月号から

建設課 小屋 昭彦

(平成22年9月〜25年4月号を担当)

平成22年8月から広報係として2年8カ月携わってきました。新生長島町が誕生し、100号の発行を迎えるにあたり、製作の喜びと苦労は広報マンにしか味わえない醍醐味といえましょう。

今回私が選んだ記事は、平成26年4月号の「島を支え続けて40年」。私が2歳の時開通しました。高度経済成長時に整備された黒之瀬戸大橋は、日本三大急潮の中、全長502mの連続トラス橋として勇敢に陸と陸を結び、長島の成長に寄与しました。

私事ですが、小さいころから通るたび、頑丈に造られた橋や道路に興味があったことから、現在私の職種でもありますエンジニアの道に進む根源でした。これまでの功績をたたえとともに長島の飛躍を願います。



No. 97 平成26年4月号から